

ブラック・ドラゴン調査報告書

田中治太郎著

1942 年頃

1942 年 10 月 30 日、私と家族（妻と 4 人の幼い子供たち）は、ヘイスティングス・パーク・マニング・センターから、主に女性、子供、高齢者で構成された避難民を乗せた最後の列車でバンクーバーを離れた。その際、108 人の病人と 1 人の介護者を残してきた。これらの人が移動する予定のニューデンバーの日本人病院が冬までに完成することを願った。目的地に到着すると、私はブラック・ドラゴン調査委員会に出席するため、バンクーバーに戻るよう命じられた。1942 年 11 月 2 日、私は保護国代表団の一員として公聴会に出席するためバンクーバーに到着した。

1942 年 10 月 30 日（金）午前 10 時 30 分。オンタリオ州ベルビル出身の著名な M.J.C.A. キャメロン判事が委員長を務める、ブリティッシュ・コロンビア州におけるブラック・ドラゴンの疑惑の活動に関する委員会調査が、刑事裁判所で始まった。バンクーバー・ニュース・ヘラルド紙の弁護人であるファリス上院議員（弁護士）は、C.L.マカルパイン弁護士および C.H.ロック弁護士の支援を受けた。両名はカナダ王立騎馬警察（R.C.M.P.）およびブリティッシュコロンビア州保安委員会の代理人として出廷した。キャメロン判事は連邦司法省によって任命された。1942 年 11 月 14 日まで続いたこの裁判に出席するため、10 名の日本人証人が収容所から呼び戻された。日本海事保安委員会の 3 名と私（保護国の一員として）が証人として召喚された。主要人物としてすでに公に知られている森井氏を除き、匿名を希望する日本人の氏名は明かさない。

ファリス上院議員は冒頭陳述で、R.C.M.P.（カナダ王立騎馬警察）が 200 人以上の日本人を強制収容所に送った原因として、日本側の関与を指摘した。ミード大佐は、ブリティッシュ・コロンビア州における日本側の主要な影響力は森井グループであったと証言した。委員会は移動を円滑に進めた。調査の中心的人物は、ブラック・ドラゴン・グループのリーダーである森井氏であり、同氏は中国やその他のアジア諸国で日本の影響下にあったとされる秘密結社と関係があると主張した。ニュース・ヘラルド紙の記事によれば、森井氏はブリティッシュ・コロンビア州保安委員会とのつながりを利用し、一部の日本人を優遇する一方で、他の日本人を犠牲にしていたという。彼はカナダに忠実であり、健全で誠実な人物である。

上院議員は、「彼は危険な人物であり、いかなる地位でもそれを悪用するだろう」と断言した。保安委員会のテイラー委員長と、カナダ王立騎馬警察（R.C.M.P.）の C.H.ヒル大佐が開会式に出席した。最初の証人は、同警察の刑事捜査局局長である F.J.ミード大佐（副長官）であった。彼は、日本

人との関わりや、日本が参戦する前の戦争に対する自身の見解について概説した。ファリス上院議員の尋問に対し、彼は、森井を「ニッポン・クラブ」の会長として知っていたと述べた。同クラブの会員は年配の日本人であり、若者たちよりも強い責任感と伝統的な規律を備えていた。その日の公聴会は休会となった

11月2日午前10時30分、ヘザー・ストリートにあるR.C.M.P.バラック・ホールで審理が再開されると、ファリス上院議員と『ニュース・ヘラルド』紙の弁護人であるG.L.マカルパイン弁護士は、同紙の主張を裏付けるため、さらなる証人を召喚した。彼らは数名の日本人証人を呼ぶつもりだった。彼らは、ブリティッシュ・コロンビア州保安委員会諮問委員会の委員であるウィンチ州議会議員、保安委員会の元名誉書記であるグラント・メキエル州議会議員、そしてセント・ジョージ合同教会の牧師であり、かつて日本に居住していたウィリアム・ノーマン牧師を証人として呼んだ。ノーマン牧師には、ある日本の雑誌からの翻訳を依頼された。

G.H.ロック弁護士（R.C.M.P.および保安委員会の弁護人）による尋問。

第1号証人（偶然の証人）：自分に接触してきた日本人の名前を明かすことを拒否した。秘密保持の誓約をさせられていたと述べた。戦後帰国した場合、森井に対して不利な証言をしたことによる報復を恐れているため、その日本人に「名乗り出る」よう説得するのは困難だろう。森井には、暴力を振るうことのできる手下がいたとされている。彼らは、その後の報復を恐れて、決して自分の名前が利用されることを許さないだろう。

第2号証人（偶然の証人）：森井が日本への忠誠を誓うファシスト団体と関係があり、排除されるべきだという情報。

ロック氏は、マカルパイン氏の尋問手法に強く異議を唱えた。同氏は証人たちが売春宿や多くの賭博場を口にするよう誘導しており、証人たちが著名な市民であるにもかかわらず、これらすべてが伝聞や秘密保持の宣誓に基づく証拠であり、公聴会で日本人証人を呼び出すまでは、真実も証拠も何もないと彼は理解できなかった。彼はキャメロン裁判官に対し、日本人証人の出廷に困難が生じた場合は、警備の保護を求めるべきであると証人たちに警告するよう求めた。そうでなければ、これらの知識人による証言は真剣に受け止めるべきではない。

マカルパイン弁護士は、森井の写真が掲載されているとされる日本の雑誌『祖国』の記事を翻訳させるため、ノーマン牧師を呼んだ。ロック氏は、その雑誌の真正性が証明できない以上、その提出に異議を唱えた。マカルパイン氏が、ロック氏は東京の編集者から証拠を入手しようと提案したのかと尋ねると、法廷は騒然となり、裁判官から叱責を受けた。裁判官は、再び同様の事態が起これ

ば法廷から全員を退場させると述べた。このような尋問と口論は、他の証人に対してもしばらく続いた。

第一証人（日本人）は、身なりがきちんとしており、口調も明瞭で、証言台に立った。彼は冒頭、森井氏が B.C.（ブリティッシュ・コロンビア州）の人々から恐れられていたと述べた。日本人は彼を好まず、いかなる形でも関わりたくなかった。それが、彼らがタシミ（日本人避難所）に行くのを渋った理由だった。証人は冒頭、自分は 26 歳でキリスト教徒であると述べた。日本人たちは、自分たちが受け取った移動通知の背後に彼がいたと信じていた。多くの質問が飛び交ったが、キャメロンは証人に、その主張を具体的な証拠で裏付けるよう求めた。証人は証拠はないと答えた。

第二の証人（日本人）。カナダ帰化人協会のスポークスマンである。彼は 5 月 11 日から 18 日の間に、ブリティッシュ・コロンビア州保安委員会の委員長であるオースティン・テイラー少佐と面会し、自分が脅迫されているとほのめかしたと述べた。証人は、移動される全員の送還を 5 月 31 日まで延期できないかと尋ねた。テイラー少佐は、カナダ王立騎馬警察（RCMP）からの命令には従わなければならないと答えたが、ある証人は何か怪しいことが起きていると示唆した。BC 州警察の弁護士から、自分を脅迫していると疑う人物の名前を挙げるよう迫られると、証人は「モリイ・グループに違いないと思う」と述べた。ロック氏はさらに『「モリイ・グループに違いない」』というのは、この国のどの裁判所でも認められないだろう」と追及した。証拠や立証は、またしても伝聞に過ぎないとされた。この証人への尋問はこれにて終了した。

第 3 の証人（日本人）は帰化漁師で、森井が長年スパイであったと主張しており、その事実が今や明らかになりつつある。かつて森井は日本人コミュニティの一部から高く評価されていたが、今では彼を高く評価する者はほとんどいない。通訳を介して証言した証人は、森井と 20 年来の付き合いだと述べた。1939 年 5 月、森井はポート・エシントンで 200 人の日本人漁師を前に演説を行った。日本人たちは、森井が日本人国民の強制移動に協力するまでは、概して彼を信頼していた。森井は、300 人から 500 人の日本人国民が自発的に沿岸部を離れるならば、残された者たちにとってははるかに楽になると述べたと伝えられている。「私は反対した。私は英字新聞を読み、状況を理解していたからだ。この問題は、それほど単純には解決できない」「2 月から 3 月にかけて」と証人は述べた。「森井の名が記された命令が出された。それが警察からの命令なのか、森井からの命令なのか、我々には判別できなかった。」「この国に対する彼の態度ゆえに、人々は森井に不満を抱いていた。彼が日本を鼻息していると感じていたのだ。ところが突然、彼は態度を一変させ、カナダへの忠誠を語り始めた。さらに、森井は不法入国者を日本へ送還させることにつながった情報を提供した。証人は、不法入国者は日本へ送還されるべきだと考えていたが、そのようなことを通報する

男は品性が低い。」ファリス上院議員は、1931年から1932年にかけて約1000人の日本人が一斉検挙・強制送還された件について、ロック氏が証人に質問することに異議を唱えた。この過程で、森井は警察と協力していた。

ロック氏：私の賢明な同僚が、この件についていい加減な態度を取っていることに異議を唱える。

上院議員は抗議した。「私はジャック・イン・ザ・ボックスのように扱われるのは好まない。証人は、200人の漁師が森井の演説を聞いたと述べた。」ロック氏は言った。「我々は確かに何人かをこの法廷に召喚できる。この件について証言させるために連れてくる数人の友人の名前を挙げればよい。そこは小さな漁村だ。皆が互いを知っている。名前を挙げるのに苦労はしないはずだ。彼らがたった一人の名前さえ提示すればよいのだ。」しかし、証人は思い出せない。話はそこで終わり、ここでの証言は伝聞証拠だ、などなど。

第四の証人（日本人）。この証人を呼ぶ責任は『ニュース・ヘラルド』紙にある。同紙は、被告である政府を欺いたとして、B.C.保安委員会とR.C.M.P.を非難していたからだ。しかし、いくつかの法的な手続きを経て、問題は解決し、証人は証言台に立った。

怒りと悲しみに声を震わせながら、彼は日本人委員会のスポークスマンとして、かなり雄弁に語った。ヒカルは、「森井氏は日本人コミュニティの要人だとよく聞いていたし、多くの友人から協力するよう強要されたのだ。私は英語と日本語のバイリンガルであり、彼のスポークスマンとしてそれが役立っている。ここで、3人の証人が森井氏のせいにしているのを聞いてきた。彼が何をしたからではなく、内閣令1665号が事態を招いたのだ。」

保護区域からの日本人（帰化者や米国生まれの者を含む）の強制移動について、彼らは自分たちが巻き込まれていない限り、真剣に受け止めていなかった。今になって、彼らはすべてを彼のせいにしている。その結果、私の子供たちは学校に行きたがらず、友達とも遊びたがらない。この職に就くよう勧めてくれた多くの友人の子供たちでさえもだ。彼らは皆、私たち家族全員を「子犬」と呼ぶ。つまり、小さな密告者という意味だ。」彼の顔には涙が浮かんでいた。裁判官は弁明の機会を与えたが、彼はあまりに緊張し、怒りに任せて二度も言葉を詰まらせた。私は法廷に恩赦を求め、それが認められた。

第5の証人（日本人）。森井の批判者たちは、彼が恐喝者のように振る舞うことを嫌っていた。森井は多くの団体とつながりを持っていたが、その一方で賭博場を経営していた。森井の日本人に対する影響力は極めて強大だった。彼の背後には柔術の達人たちが控えていたからだ。証人は、別の日本人が、退去の延期を得るために、森井が率いるニッポン・クラブに300ドルを持参したと自分に

話したと述べた。3月までは、日本人コミュニティは移動の可能性について森井に責任を負わせることに満足していたが、移動が確実になると、すべての日本人組織がその責任を分担したがるようになった。森井は当初、避難手続きにおいて他の日本人団体と協力する意向を示していたが、代表委員会の会議に出席せず、結局、彼抜きで会議は進められた。

同じ出来事が繰り返されるのを聞くのにうんざりしていたので、私はオキシデンタル社の若手パートナーが管理している自分の工場を見に行くことにした。すべてがかなり順調に進んでいるようで、私は満足した。夕方7時半頃、私は滞在していたホテルに戻った。H氏が神経質になっているのを見て取れ、彼は私の部屋で寝たいと申し出た。理由を尋ねると、森井氏がまるで殺してやるような目つきで自分を見たのだと答えた。私は彼を南京レストランに誘った。彼は店が暗くなっていると言ったが、私は指示通りにするよう伝えた。腹いっぱい食事をした後、今夜は私の部屋に来てもいいと伝えた。なぜそんなに神経質になっているのかと尋ねると、彼はこう答えた。「君が呼び出されたのは、森井氏に何か伝えることがあるからだと考えていたんだ」「ああ」と私は言った。「私もそう思っていたが、そうではなかった」。私は彼を落ち着かせようと努め、法廷で森井氏に対して不利な証言をした。私は裁判官に言った。「真実を話したい」。「森井さんがとても緊張しているのは分かっている。弁護士たちは落ち着くために脚をこすったりするものだから」。「嘘の証言をするのは簡単だということは分かっている」。彼は言った。「申し訳ない、私は窮地に立たされている」。私は彼に「できるはずだ」と伝え、彼は約2週間後にニューデンバーへ移送された。

第六の証人（日本人）。彼は証言台に立たされた。ファリス上院議員はこの証人への尋問に非常に慎重だった。ここには、森氏に対する証拠を突きつけることのできる証人がいたのだ。彼は信頼を得ようと、非常に穏やかに尋問を始めた。やがて苛立ちを露わにし、ごく気さくな口調で、なぜ他の証人よりも緊張しているように見えるのかと尋ねた。「私が求めているのは真実だけだ。真実以外は何もいない。もし嘘をつけば、裁判所はあなたを厳しく処罰するだろう。さて、君は10月13日にタシメへ避難したが、3、4ヶ月前に避難した他の避難者の大半も一緒だった。森井氏に渡した300ドルは、避難の延期のためだった可能性はあるか？」証人は答えた。「それは慈善基金のためだ。日本クラブは、道路建設キャンプにいる夫を持つ家族を助けるために募金を行っていた。」尋問は次第に声高になり、厳しさを増していった。上院議員は証人に尋ねた。「それは現金か小切手か。現金だ。」「なぜ現金なのか？」「クラブはたった1ブロック先だったし、戦争が始まってから皆現金が欲しがらるからだ。」「領収書はもらったか？」「いいえ。」「なぜだ？」「もらわなかった。」「領収書がないと言うのか？あり得ない。何か隠しているんだ、だから緊張しているんだ。」「真実を話せば、法はあなたに寛大だろう。」今や、証人はあの有名な弁護士の戦略のあらゆる手口で執拗に攻め立てられていた。ロック氏は何度か割って入った。「上院議員は、証人に言葉を吹き込み、怖がら

せて『移動延期のためだった』と言わせようとしている。」「これ以上質問すれば、この証人は気が狂ってしまうだろう。」しかし上院議員は、質問の言い回しを何度も変えてきたが、証人は慈善基金の話に固執した。裁判官はそれ以上の質問を止めた。証人は退廷した。

第七の証人（日本人）。彼は多くの顧客から、森井から支払猶予を得たという話を聞かされていた。

第9の証人（日本人）。彼は雑誌『創刊』と、日本の国会でファシストグループを率いる北総理と森井氏の写真を提示した。彼は、北氏が1939年に「アジア新秩序」の巡回使節としてここに来たと言った。その他、その他。

その後、さらに2人の日本人証人が、収容所内の数人の日本人が、日本戦時委員会から暴行を受けたり、金銭を渡されたりしたと述べた。裁判官は、言及された日本人たちがその証言を裏付けられるか確認するため、収容所へ電報を送るよう指示したが、証人たちは名前を明かすことを拒否した。

第10の証人（日本人）。彼は第一次世界大戦の退役軍人で、カナダ軍に所属していた。彼は、ニッポン・クラブで森井氏に3階の階段から2階へ突き落とされたと述べた。森井氏を見れば分かるが、身長は5フィートほどで、物腰の穏やかな人物だ。一体どうやって、第一次世界大戦の軍曹をあれほど簡単に投げ飛ばせたというのか？これが聴衆の印象だ。森井氏は空手三段であると法廷で伝えられた。裁判官は、身体的危害を伴う暴行罪で刑事裁判所に森井を訴えることができると述べたが、この証人に対してはそれ以上の発言はなかった。

他にも多くの証人がいた。オキシデンタル社、下院議員グラント・マクニール、州議会議員ウィンチ、管理部門責任者のマクファーソン氏、キッツラノの教師ブラック博士、そして日本人から接触を受けたと疑われる謎めいた秘密の人物I氏など、挙げればきりが無い。

バンクーバーの日刊紙の見出し：

日本人は、保安グループに対する森井氏の影響力を快く思っていない。

「ブラック・ドラゴン」は依然としてブリティッシュ・コロンビア州で活動中。

日本人は森井を恐れている。森井に関する報告書は依然として対応待ちの状態だ。

「日本ブラック・ドラゴン」はブリティッシュ・コロンビア州内で活動している。

これらの見出しはすべて、1面の大見出しとして掲載されていた。

森井悦司氏が「ブラック・ドラゴン」公聴会の最後の証人として召喚された。彼は 1939 年の演説における反英発言を否定した。ファリス上院議員からの質問に対し、彼は断固として否定した。

1942 年 11 月 14 日（土）、調査の最終日。

ファリス上院議員は、慈善活動や資金について尋ね、森井の名をかなり強く取り上げた。証人たちは、それが移動延期とは無関係であることを巧みに説明した。

さて、上院議員はこれまでの日本人および西洋人の証人全員に失望していたため、表面的な質問しかなかった。彼は、これらの人物を法廷に召喚できるかと尋ねた。証人は、彼らが決して出頭することはないと答えた。

第 8 の証人（日本人）。彼はブリティッシュコロンビア州の漁業協会の書記であった。彼は、この地で「黒龍会」について聞いたことはないと言ったが、日本の雑誌『創刊』でその団体について読んだことは認めた。

証言の時が来ても、証拠は何もなかった。彼らの情報を裏付けるために名乗り出た日本人は一人もいなかった。それは単なる噂に過ぎなかったか、あるいは法廷の保護下にあっても、彼らは恐れて出頭できなかったのだ。これらの著名人たちの証言は、『ニュース・ヘラルド』紙にとって全く役に立たなかった。

ブラック・ドラゴン調査委員会は、証拠、立証、証人、あるいは具体的な証拠を持って証言するために名乗り出た人物を一人も提示できなかった。この公聴会は、森井氏が何の不正も犯していないとして終了した。1942 年 11 月 14 日（土）、裁判所は閉廷した。

スロカン・バレー地区の総監督官であるボルトビー氏は、私にできるだけ早くニュー・デンバーへ来るよう求めた。日本人病院の日本人大工たちがストライキを行っているのだ。私は急いでその場所へ向かった。

出典

この文書記録は、J.C.タナカによる「ブラック・ドラゴン調査」と題された 4 ページの報告書から成る。報告書は黒龍会に言及しており、森井悦司氏、オンタリオ州ベルビルの M.J.C.A. キャメロン判事、バンクーバー・ニュース・ヘラルド紙の顧問弁護士であるファリス上院議員（K.C.）、C.L. マカルパイン（K.C.）、R.C.M.P. および B.C. 保安委員会の代理人である C.H. ロック（K.C.）などの名前が挙げられている。ニッポン・クラブ；日本戦時保安委員会；保護国；『祖国』誌；カナダ帰化人協会；漁業協会；B.C. 保安委員会委員長、オースティン・テイラー少佐；R.C.M.P.（カナダ王立騎馬警

察) コミッショナー、C.H.ヒル大佐；刑事捜査部隊長、J.F.ミード大佐；州議会議員、ウィンチ氏；
グラント・マクニール州議会議員；ウィリアム・ノーマン牧師；ナンキン・レストラン；北社長；
およびスローカン・バレー地区総監督のボールビー氏。

所蔵：田中治太郎・澄子コレクション

番号：2002.2.1.3.168

機関：Nikkei Museum and Cultural Centre, Burnaby, British Columbia

アクセス日時：1926 年 5 月 17 日 午後 8 時 59 分